



映画に  
宛てた  
ラブ  
レター

2013年8月号

天見谷行人

## エンド・オブ・ホワイトハウス

2013年7月5日鑑賞

\*\*\* 時代の流れを映画で読む \*\*\*

観終わったあとで、ズシッと重量感が残るアクション大作ですね。この作品のすごさは、「もしかして、これって、今、起こっても不思議じゃないよね？」

と言う、映画だけの話に終わらない、真実味があることです。それがズシリと響くのです。ホワイトハウスが襲われる。そして陥落する。人質になった大統領達を、一人の元シークレットサービスの男が救い出すと言うお話です。

今の時代、超高層ビルに飛行機が突っ込む時代です。何が起こったって不思議じゃありませんね。

映画を観ていて勉強になる事の一つに「時代の流れがわかる」と言う事があります。

かつてのアメリカが目の敵にしていたのはイラクなどの中近東、石油の利権が絡む問題がそのベースにありました。ところが、本作ではついに北朝鮮の脅威がストーリーの背景になっているんですね。



北朝鮮と思われるテロリスト達によって乗っ取られた、アメリカ空軍の AC-130。この殺戮マシンがホワイトハウス目掛けて襲いかかります。これ、ミリタリーマニアにはたまらない設定でしょうね。本来は輸送機の C-130 なんですが、それを対地上戦用に改造した機種なんですね。もちろん実在のレアもの兵器です。機体の左下側にはズラリとバルカン砲が並んでいます。機体は左旋回しながらホワイトハウス目掛けて、雨あられの如く弾丸の雨を降らせてゆきます。この機体、

地上の目標物一カ所を連続射撃によって、敵に逃げる隙を与えず、徹底的に叩き潰すために開発されてるんですね。

いや、この銃撃の凄まじさ、迫力は半端ではないです。

「プライベートライアン」のあの有名な冒頭30分の戦闘シーンにも匹敵すると思います。

まあ、この攻撃によってホワイトハウス地上防衛部隊は全滅。大統領とその側近達はテロリスト達によって、地下の核シェルターに連れ込まれます。

ホワイトハウスの危機を知った、元シークレットサービスの男。彼が一人、ホワイトハウス内に入る事に成功します。彼は無事、大統領達を救い出せるのか？

ハラハラドキドキの極上アクション、サスペンス劇が展開されてゆきます。

だけどまてよ、どこかでこのシチュエーションってなかった？

そうです。Yahoo映画レビュアーの皆さんもご指摘の通り、これ、まんま、あの傑作アクション映画「ダイハード」のパクリなんですね。

だけど、そこは目をつむって、あえて、どの様にうまく「パックしてくれるのか？」を楽しむのも、この手の映画の楽しみ方ではないでしょうか？

また、本作では名優モーガン・フリーマンが、米下院議長役で実にシブい演技を見せてくれています。僕も彼の大ファンなので嬉しくなります。先日観た「オブリビオン」でのモーガン・フリーマンには、正直ずっこけましたがね。

(^\_^;)

さて、救出に向かう主人公。

彼には苦い経験がありました。大統領を警備中、事故で大統領夫人を救えなかったのです。

彼は大統領とも、家族の様に親しい。大統領の息子なんか、タメ口を交わし合う、自分の甥っ子みたいに親しい間柄。すでに彼にとって大統領一家は、親族も同然だったでしょう。しかし、彼はその命を守れなかった。彼は傷つきました。

「あの時の自分の判断は正しかったのか？自分はなぜ任務を遂行できなかったのか？なぜ命を救えなかったのか？」

彼は自分自身を責めます。

のちに彼は「やり直せばいいんだ」という言葉がある人から贈られます。その言葉は彼を救います。



僕もかつて会社勤めをし、ひとつの店を任されていた時があります。営業成績は伸び悩んでいました。そのとき社長から

「間違えたのなら、最初に戻ってやり直せばいいんだよ」と声をかけられ、涙が出るほど嬉しかった事を覚えています。

そういう経験値をもってこの作品を観ると、また違った味わいがあると思うのです。

なお、テロリストの主犯格を演じた役者さん、この人の演技も注目したいですね。

なお、いつもこういうアクション、戦争映画を観て思うことですが、大量に殺されてゆくエキストラの皆さんもそれぞれに、人生があるんだよねえ。主人公、ヒーローの命も、エキストラの命も、命の重さに変わりはないということを肝に命じて、映画を楽しみたいものです。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督       アントワーン・フークア  
主演       ジェラルド・バトラー、モーガン・フリーマン、  
            アーロン・エッカート  
製作       2013年   アメリカ  
上映時間   120分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=-xAANNb2SNs>

2013年7月10日鑑賞

\*\*\* ちっぽけなイカダと人間が見た大きな夢 \*\*\*

誰もが、子供の頃、一度は聞いたことがある「コンティキ号」の冒険のお話。いままで、何で映画化しなかったのか？むしろそれが不思議なぐらいだ。もっとも、実際の航海の時に撮ったフィルムがあり、それがドキュメンタリー映画としてアカデミー賞に輝いている。いまさら、脚本を書いて、物語としてリメイクするというのは、それ自体がかなりの冒険だ。

主人公ヘイエルダールはもちろん実在の人物。彼は研究のためポリネシア諸島に奥さんとしばらく滞在した。その時から彼には、ひとつのアイデアが頭から離れなくなった。

この島に住む人たちの身体的な特徴や、崇拜する神の象徴。それらが、南米に住む人達と極めて似ているのだ。彼は自分の想像力にとりつかれてしまう。もし、古代の人達が海を超えて、この島に移住したとしたら？南米からポリネシアまで、その距離8000kmをだ。

誰もが行けるはずがないと思う。だけど彼の研究者としての執念は凄まじい。

古代の人達と同じイカダを作ってみよう、大海原を渡ってみよう、実験すればいいんだ、と。

彼はスポンサーを探し、乗組員を探す。やがて彼の熱意はコンティキ号というイカダと、乗組員を得ることになる。

イカダはタグボートに引かれて外洋に出る。

そしてうまく貿易風と潮流に乗ることに成功する。この流れに乗りさえすれば、後はポリネシアまで、風と潮の流れがイカダを運んで行ってくれる。実際、この航海は船で航海したというよりも、あくまで、何もせずに漂流することによって、ポリネシアまでたどり着けることを証明したのである。

ただ、この漂流実験が行われたのは1947年である。その後の研究によって、ポリネシアの人達が、必ずしも南米から来たという証明にはなっていない、ということが分っているらしい。いまはハイテクによる研究ができる。人のDNAも調べることができるようになった。そこから、冷徹で、予想もつかない意外な真実が明らかになる事がある。科学というのはそうやって進化してゆく。

この作品はドキュメンタリータッチではなく、観客が観て楽しい、ファンタジーに近い味付けがなされている。

航海の途中、針路に迷ったり、サメに襲われたり、仲間割れしたり、大波に飲み込まれそうになったりと、観客を飽きさせない工夫がなされている。

この作品を観て改めて思うのは、あまりにスケールの大きい大自然だ。その巨大な大自然に挑もうとするイカダと人間達の姿は、滑稽なほどちっぽけだ。

本作に登場する巨大なジンベイザメや凶暴なサメ、天空に轟く稲妻や嵐。それらはすべて自然界が生み出したものだ。それに比べ、小さなイカダの上でさえ、いさかいを起こす人間は、何とちっぽけで頼りない存在なのだろうか。

西洋の人達には、その心情の根底に、自然を征服する事への強い意思を感じる事がある。

だが、古代のペルー人やポリネシア人達の自然観は、きっと近現代の西洋人の自然観とは違うはずである。

そのあたり、主人公ヘイエルダールはどう考えていたのだろうか？

僕は作品を観ながら、改めて自然への畏怖の念を抱いた。それは自然と共存する事を好む、東洋人の自然観なのだろう。自分のカラダに染み込んだ、この感覚。ああ、自分はどうしようもなく東洋人なのだ、と強く感じた。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ヨアヒム・ローニング、エスペン・サンドベリ

主演 ポール・スヴェーレ・ヴァルハイム・ハーゲン、  
アンドレス・バースモ・クリスティアンセン

製作 2012年 イギリス,ノルウェー,デンマーク,ドイツ

上映時間 113分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=arVeYKFRk9U>

## さよなら溪谷

2013年7月7日鑑賞

### \*\* 憎しみと復讐から愛が生まれる時 \*\*

この作品を観に行くのは、僕にとって、ちょっと勇気が必要だった。原作は「悪人」の吉田修一氏である。

当然のように、暗くて重いテーマの、シリアスなドラマ、人間内部のドロドロした部分を描くお話である。

自分の精神状態がいいときに観にいかないと、あとあとまで引きずりそうな気がしたのだ。体調と気合を整えてようやく観に行った。

観終わって、やはり、いい意味で後に引きずる映画である。

「真木よう子」という女優は、ハンパじゃないんだよってことを観客に見せつけた映画でもある。



主人公は集団でレイプされた過去をもつ女性である。その過去が彼女の宿命として重くのしかかる。

事件から何年か経て、結婚しようとするが、相手が嫌がったり、そういう女はやめておけと、相手の親族が妨害する。

ようやく結婚にこぎ着けたら、今度は夫のDVだ。

彼女は自殺未遂を図り、やがて失踪する。

この作品、まずは監督が切り取って見せる絵がいいなあ。ひとつのカットの長さ、編集、ロケーション、これらがなんとも絶妙なのだ。

いいシーンがいっぱいある。

例えば電話ボックスのシーン。

たぶん、これゲリラ撮影だよね。手持ちカメラで遠景から撮る。電話ボックスの中で、へたり込んでいる真木よう子がセリフをしゃべり始める。相手役の大西信満が駆け寄って、会話になってゆく。カメラは徐々に二人に近づいく。やがて二人を画面いっぱい撮ってゆく、というワンシーン・ワンカット。

さて、加害者の男、俊介。

彼は彼なりに罪を償おうとした。

彼女に謝罪しようと思った。

「だったら、あたしより、不幸になってよ！！」

真木よう子が叫ぶ。

そしてあてもなく、彼女は電車に乗り、終着駅までゆき、歩いて歩いて、歩き抜く。

田舎の一本道、真木よう子が先を歩き、それを追いかけるようにして、俊介がついてゆく。

「ついてこないでよ！！」と叫ぶ、真木よう子。その背後に映る田園風景と、今にも台風が襲ってくるような真っ黒な空。このシーンは見応えあるねえ。よく、こんな絵が撮れたねえ。

俊介はそれでもついて来た。

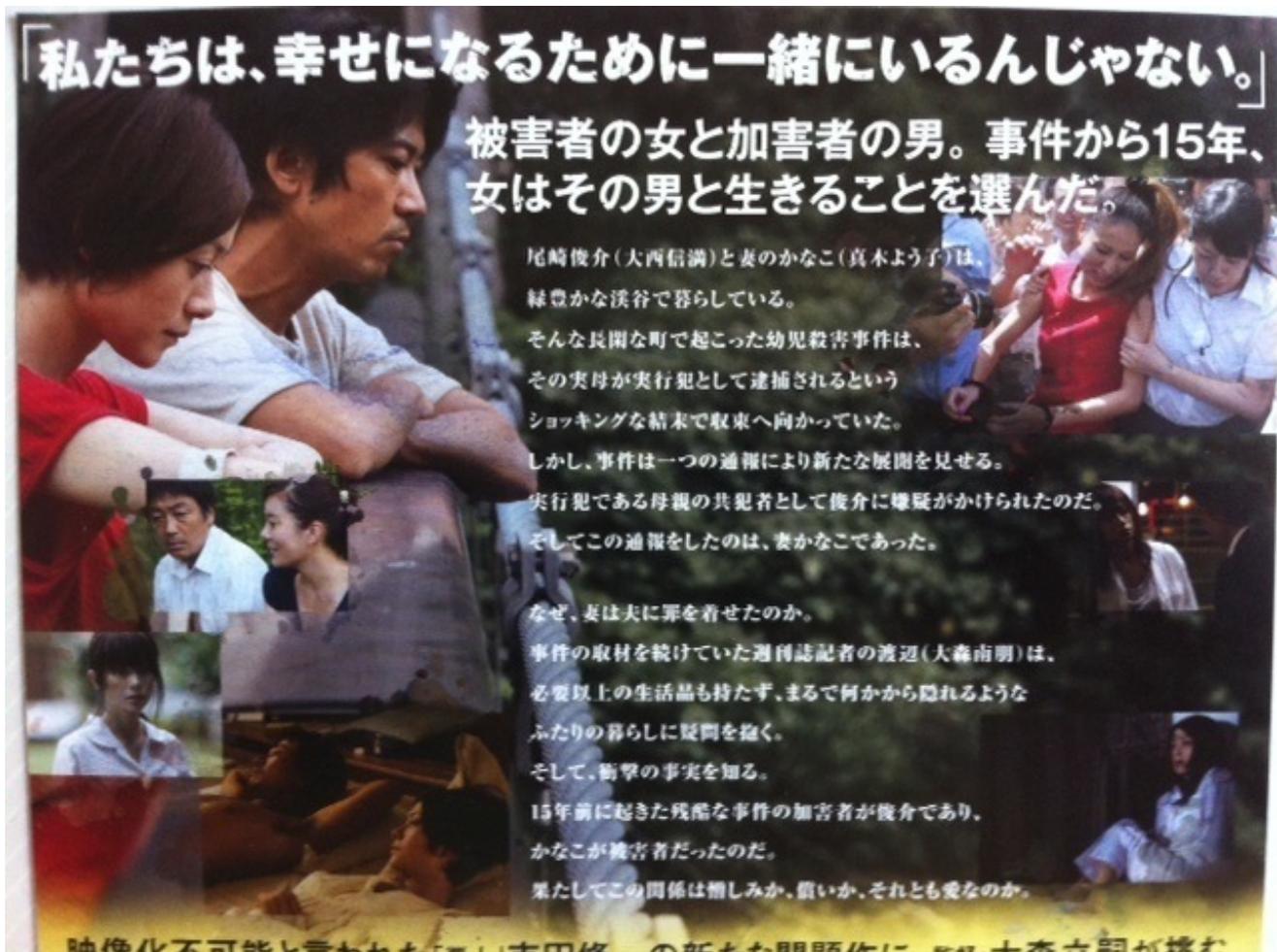
この時の真木よう子のセリフがいいなあ。

ふりかえってボソッと

「おなか減った」

二人は食堂で食事をする。俊介は彼女の奴隷になる覚悟をする。

そして後に二人はようやく一つの安住の地を得る。



彼女は偽名を使う。実はレイプされかけたとき、彼女はもう一人の女友達と一緒にだった。その女友達は先に逃げ出していた。

彼女はその女の子「かなこ」として生まれ変わる事にした。

誰も自分のことなど知らない地方の街で、ひっそりと影を隠す様に生きてゆく。

やがて彼女は被害者である自分に、被害者であるがゆえの「強み」と「権利」が発生している事に気がつく。

それを利用してやろうとする。そこには明らかに悪意がある。彼女は、加害者である俊介と一緒に暮らし、セックスをする。快感を得るのも、すべてこの男から幸せを吸い取るためだ。俊介もそれでいい、と覚悟を決めている様である。後に彼女は、隣に住む、自分の子供を殺した主婦と、俊介は親密な仲だと、警察に告発する。

俊介は警察に拘束され取り調べを受けるが、やがて釈放される。「かなこ」がいる部屋に戻って来た。彼女は俊介を何事もなかったかのように迎え入れる。

「おなか空いてる？チャーハンならつくれるけど」

「うん、食べたいな」

なんという二人なのだろう。

彼は罪を償いたかった。彼女が死んでくれと言えば死んだだろう。

憎しみと、憎悪と、贖罪を共有するために、生活を始めたふたり。やがてほのかに湧き上がってくる、どうにも厄介な「愛情」というもの。

彼女はそんな自分自身が、許せなくなっていたのではないだろうか？

観客に問いかけを放り投げる様にして、この作品は終わる。見事な、見事なエンディングである

と僕は思った。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 大森立嗣

主演 真木ようこ、大西信満、大森南朋

製作 2013年

上映時間 117分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=ulRuTVPfB9g>

7月21日鑑賞

＊＊逆風の中、夢を追い続ける若者達へ＊＊

最初にこの作品を観終わって「ああ、宮崎監督は大変な作品を作ったものだ」と圧倒された。と同時に、

「もしかすると、宮崎監督はこの作品を最後に、筆を置く覚悟かもしれない」と思った。生半可な映画レビューなど、書く隙さえ与えないような、緻密さと厳しさを持つ作品である。いま、二回目の「風立ちぬ」を鑑賞して、ようやく個人的な感想を書き留めておこう、と思った。

本作は子供向けには作られていない。また、宮崎監督は、始めて実在の人物を取り上げた。零戦の設計者として著名な堀越二郎と、文学者の堀辰雄を、まるでエンジンに送り込む、ガソリンと空気の混合比のように、実に巧みに混ぜ合わせているのだ。決して単純に足して二で割っただけの人物像ではない、宮崎監督オリジナルの第三の人物像なのである。

この二人の人物に共通しているのは、彼らが生きた時代である。大正から昭和、そして戦争の時代を生きぬいた人物だ。

ぼくは以前から、大正から昭和の始めにかけて、実はとても良い印象をもっていた。

その時代には「大正デモクラシー」という夢があった。東の間の好景気があり、街には「モダンボーイ・モダンガール」（略してモボモガ）と呼ばれる西洋風なファッションを楽しむ男女がカフェに集い、カルピスが始めて飲まれ、宝塚少女歌劇が人気を博した。

活気あふれる街と庶民の文化が開花した時代だ、と僕は感じていた。

その空気感は本作のヒロイン菜穂子と、二郎の恋物語の背景としてふさわしい、ロマンチックな雰囲気には溢れている。



しかし、本作でも取り上げているように、大正12年には関東大震災があり、銀行の取り付け騒ぎや、恐慌への恐れもあり、更には軍内部の圧力が徐々に限界点に達しようとしていた。1932年、昭和七年には五・一五事件が勃発、犬養首相が射殺される。

宮崎監督のような希代の創作者は、時代の空気を、誰よりも敏感に感じるセンサーを持ち合わせている。

この作品は宮崎監督から、若者達への「最後の」メッセージであろう、と僕は感じた。

「これからの日本は、決していい時代には向かわない」

若者は、そういう厳しい時代、向かい風の時代に、やむ終えず立ち向かわざるを得ない。そんな若者達へ宮崎監督は、あの無謀な戦争へ突き進んだ時代に生きた、生き抜いた、堀越二郎と堀辰雄という人物像を、あえてぶつけてみようとしたのだ。

そういうメッセージを若者達に送ろう、という決断に至った宮崎監督の覚悟の強さを僕は思う。

それは時代のセンサーとしての強烈な覚悟であろう。

実はその覚悟を知る一つのヒントが本作のタイトルである。

ご承知の通り、宮崎監督の作品は、いままで「となりのトトロ」「紅の豚」という風に、作品タイトルに「の」がついていた。



デリケートな問題である。宮崎監督が描きたかったのは、その側面ではないのだ。  
宮崎監督が創造的にこしらえあげた「堀越二郎」という人物像は、あくまで「夢をカタチにする」表現者として作品に登場するのである。  
映画監督は自分の夢を映画という表現方法でカタチにする。  
同じように航空機設計者は夢を飛行機に託す。  
当時、飛行機を作る事は軍用機を作るという事と同じであったのだ。  
堀越二郎が幼い頃から憧れた、イタリアの飛行機設計者カプローニと、夢の中で語り合うシーンがある。  
足元にはおびただしい戦闘機の残骸。  
どこまでも青い空に上ってゆく、パイロット達の幾多の命。  
「一機も帰って来ませんでした」  
二郎はつぶやく。  
それでも時代の風は吹いている。  
若者はその向かい風の中で夢をみる。  
若者達は困難な時代のなかで、これからどんな夢をカタチにしてゆくのだろうか。  
僕はこの作品を、出来るだけ多くの若い人達に観てほしい、と思う。どんな感想を持ってもいい、今、理解出来なくても構わない。烈しい向かい風の中で、宮崎監督のメッセージに、ふと気がつく時が、必ず来るであろうと思う。

なお、私の信条として、新作映画の総合評価は常に最高点を四点までにして来た。だが、ストーリー、声優のキャスティング、映像、演出、音楽、どの項目を眺めても、ケチの付けようがないのだ。  
ゆえに2010年公開、中島哲也監督の「告白」以来、二作目の満点評価となった。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆  
配役 ☆☆☆☆☆  
演出 ☆☆☆☆☆  
美術 ☆☆☆☆☆  
音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 宮崎駿

声優 庵野秀明、瀧本美織、西島秀俊

製作 2013年

上映時間 126分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

[http://www.youtube.com/watch?v=7Z1uo\\_511Xs](http://www.youtube.com/watch?v=7Z1uo_511Xs)

映画に宛てたラブレター 2013・8月号

<http://p.booklog.jp/book/74013>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74013>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74013>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ